

第9回呉九条の会の記念講演での講師はアーサー・ビナード氏であった。氏の日頃から反戦平和に徹した行動が表れた講演内容であった。

若くして東京へ来た時、氏が驚いたのは第二次世界大戦中にアメリカ軍のやった空襲と日本における被害についてアメリカでは国民に知らされていず、従ってビナード氏が全く知らなかった事実を知ったことだという。親しくなると東京の人々はビナード氏に空襲時の話をするようになった。顔が見えるほどまで降りてきた飛行機から「私そっくりの顔の飛行士」が撃ってきたと。ビナード氏は「ごめんなさい」と言ったという。

ビナード氏が広島へ来て驚いたのは、原子爆弾のことを広島の人々が「ピカ」と呼んでいることだった。「原子爆弾」は、作る側、落とす側、つまり上からの目線での呼び名であり、「ピカ」は落とされた側、下からの目線であると気付いたという。なるほどそのとおりでアメリカ人らしい。「ピカドン」は、私のように「ピカッ」という光を見、「ドーン」という音を聞いた者たちが、正体不明の恐ろしい破壊物として自分たちの実感でつけた呼び名であって（政府は新型爆弾と言った）、敗戦後すぐに原子爆弾なる語を知ってからは「原爆反対」など社会的・科学的に言う時と、「父がピカにやられて」と被害時の話をする時とで表現を使い分けているが、初めて「ピカ」と聞いた時のビナード氏の驚きは分かる。ついでに言うと、「原子爆弾なる日本語は『アトミック・ボンブ』の直訳だ」とビナード氏は言ったが、これは違う。日本でも戦時中に理化学研究所（あのSTAP細胞騒動を起こした今に続く理研である）で研究していた原爆の作り方は知っていた。だから被爆直後、広島で調査した理研の中心人物、京大の仁科芳雄博士は「これは原子爆弾である」と言っている。

それはともかく、ビナード氏は呉へ来たのだからと大和ミュージアムに触れた。「なぜ『ミュージアム』だ。なぜ漢字にしないのだ」と。そして、「あそこの中身は宣伝であって歴史・科学的、客観的展示でないので『博物館』と言えなくて『ミュージアム』なんだ、見るべきものは『鉄のくじら』の方だと皮肉たっぷりに言った。

その外、呉空襲の時、戦艦大和は逃げ回っていたのだ、皇居は爆撃を避けたのだ、などと質問やユーモアを交えて時間オーバーも気にせず、興に乗せる話しぶりだった。

講演後、詩や評論、絵本など十種類の氏の著書のサインセールには長い行列が出来た。